

ある女性幼児教育者の記録 ～社会学的視座から～ I

鈴木 久美子

キーワード／藤野敬子、質的調査、ナラティブ・インタビュー、女性史

1. はじめに

Jちゃんが自殺したというのを聞いて、とても私ショックだったんですね。Jちゃんというのを考えてみると、能力的にはすぐれた、いろいろなセンスのあるお子さんでしたけど、その時分、けんかの研究をしていまして、毎日けんかの記録を出していたとき、Jちゃんはけんかの記録にほとんど載っていないんですね。友達と遊べない子どもがけんかが少ないのはわかるでしょう。そうじゃなくて、Jちゃんは、いつも誰かと楽しい遊びに入ってるのに、Jちゃんのけんかの記録がないわけですよ。よく見てみると、雲行きが怪しくなると、すっと抜けるんです。それで、そろそろ仲直りしたなってわかると帰ってくるわけ。だから、同じグループで遊んでいても、Jちゃんはけんかの記録に載らなかったんですね。なんとなくけんかして気持ちがぶつかり合う、そういうところが弱いというか、いたたまれないというか、そういうところがあったんですね。でも、私、それが将来の自殺につながるなんて夢にも思わないし、ああ、Jちゃんは気持ちが優しいからかな、ってその時はそう思っていたんです。だから今、もっと自分がけんかのトラブルに巻き込まれるようなところでも、たくましくそこに居残って我慢してというふうなこと、もうちょっと寄り添ってあげればよかったのかなと思うんです。その時にその子がたくましく生きていくため、何が必要なのかということ、ゆっくり一人ひとりの気持ちを受け止めながら、こちらを介しながらということが、私の保育では足りなかったということですね¹⁾。

以上は、あるシンポジウムの中で幼児教育者・藤野敬子氏が語った言葉の一部である²⁾。筆者はこの時初めて、藤野氏の話を書く機会をもち、極めて強い印象を受けた。そして中でも、かつての教え子が成人後、自ら死を選んだことに対するの悔恨を、こうした場でこのようなかたちで述べたことに対して、衝撃を受けたといっても過言ではない。そして、この日の藤野氏の語り全体を通して、藤野氏の幼児教育者としてのあり方はもちろんのこと、一人の人間・藤野敬子という人に、とてつもなく強い関心をもった。そこで、彼女の人生や過去の出来事の実験、これまで触れ合った人々について、〈社会調査者〉として藤野氏と直接対面して、彼女の話の聴き取ってみたいと考えた。〈語り手〉としての藤野氏と向き合ってみたくなった。「これまでの人生であなたが経験したことをお話いただけませんか」と。

そこで、藤野氏が静岡大学教育学部附属幼稚園副園長時代に、当時まだ若い一教員として共に現場で過ごし、藤野氏を恩師として仰ぐ永倉みゆき氏との共同研究というかたちで、藤野氏に対するインタビューを開始した。その際、永倉氏は「保育学」の視座から、今なお多くの保育者・研究者を魅了する藤野氏の保育思想を検証し、筆者は「社会学」の視座から、藤野氏の人生を「昭和の女性史」として編纂し、藤野氏そのものに迫るという、「保育学」「社会学」と異なる2つの学問領域から、氏の存在性を明らかにすることを目指した。研究

としてはまだまだ途上にあるが、本稿を社会学的視座からの最初の記録とする。

2. 研究の目的と方法

本研究は、社会学研究としての質的調査によって行うものである。質的調査といっても捉え方はさまざまであるが、ここでは、主にインタビューや参与観察あるいは文書資料や歴史資料の検討などを通して、文字テキストや文章が中心となっているデータを集め、その結果の報告に対して日常言語に近い言葉による記述や分析を中心とする調査法とする³⁾。つまり研究対象をその複雑な姿のままに、自然な日常の文脈で記述するものである。そのため、本研究の対象者である藤野敬子氏に対し、その人生そのものを語っていただくナラティブ・インタビューを実施した。これは、日常的な生活世界の中で、その体験の記憶をひとつの物語として主体的に生きられた現実を明らかにすることを主眼とした、構造度の度合いは極めて低い半構造化インタビューとして位置づけられよう。なお、本稿で用いたデータは、2009年(平成21年)6月6日、7月4日、8月14日、9月7日の4日間、いずれも4時間程度の時間をかけて、藤野氏の自宅において聴き取ったものである。

本稿は、「データ自身に語らせる」というスタイルをとりたい。〈語り手〉である藤野氏と〈聴き手〉である筆者との相互行為のやりとりのなかから、その人生の断片を、その時代、その社会と重ね合わせることによって、「昭和から平成を生きた一人の女性幼児教育者の物語世界」として構築することを目指している。そこで以下より、自身の〈語り〉から「藤野敬子という女性の人生」を見つめていく。

3. 藤野敬子の履歴書

私は松山にある私立勝山幼稚園に2年と4ヶ月勤めましたが、そこが震災にあってだめになりましたね。それから静岡へ来て、偶然のことで静岡第一師範学校の附属幼稚園に勤めるようになったんです。その附属幼稚園は始めが13年で、国際基督教大学に進学して、そこに5年間いて、そして帰ってきてからが19年。通算32年と一番長いんですね。そして、今考えるとありがたいんですが、ICUに進学する時、学費がいるから、退職金を貰いに行っただけです。そしたら奥の方から誰か出てらしてね。「今、全額退職金を貰うと、これで切れちゃうけど、通算っていう制度があるから、一部分残しておおきになると、後で続きますよ」って言われたの。その時は若いから、学費が足りなくなるかなと思ったんですけど(笑)、結局、それをしたおかげで、帰って来てから19年だから、年金に1年足りないわけじゃない、60歳まででね。でもその方のおかげで今、恩給いただいているの。わざわざ奥から出てきてね、そんな親切にしてくださる方のおかげで(笑)、今、安穏と生活してるんです。

附属幼稚園を退職後は4年間、東洋英和幼稚園に園長として勤めました。英和に行っただけ経緯は、ミス・マクラクラン⁴⁾のバイブルクラスっていうのに静岡でずっと行っていて、その人たちとの交わりがあって、マクラクラン先生に文集を贈ったんですね。その文集をたまたま東洋英和の方が見て、「藤野さんってクリスチャンなのか」ってわかって、呼んでくださったの。それで現場は終わって、そのあとは養成校の講師として青山学院大学が4年、東洋英和女学院短大が6年、白梅学園短大で7年勤めて、それからはフリーでいろいろ。去年は2

つの幼稚園に研究保育で行きましたけど、「もうおしまいにするよ」って言っています。今年はだから、キリスト教保育誌に『幼子とともにキリストへ』と題しての原稿を出してるだけ。これも2010年3月で終了予定。これがおよその略歴ですね。

初めてのインタビュー時に、筆者がインタビューの趣旨を説明したあと、飄々としかし端的に自らが語った経歴が、以上のものである。そして、後に付け加えた。

保育者の生活がもう66年で、今年で終わりになるんですね。満17歳からやりましたので、今、満83歳でしょ。66年も保育者をやったんですね。だから、保育者になった経緯をね、お話ししようかなと思ったんです。なんで保育者になったか。66年も勤めたんだから、ちょっと考えれば、自分で構想をたてて、それで計画をたてて、いろいろ運動してなったように思うでしょ。ところが全部偶然なんです（笑）。おもしろいんですよ。私が自分で保育をしたいとか、自分で、ってこと一度もなかったんですね。不思議なんですよね。ありがたい一生だったなあって感謝してるんですけど。

藤野の言葉によれば、「偶然」の連続の保育者生活であった。しかしそれは「必然」であって、藤野という人材を現場は欲し、彼女自身それに抗うことなく、ひたすら保育者として歩み続けてきたということではないか。そして今回のインタビューも、仕事の整理を始めようという藤野自身の思いと、藤野の保育思想を、彼女の人生を直接、本人から聴き取りたいという筆者らの思いが「偶然」にも重なった幸運な出会いではあった。だがこれもまた、66年目の区切りに起きるべくして起こった「必然」なのかもしれない。

さて、改めて藤野敬子の履歴を整理しておこう。1943年（昭和18年）に松山の勝山幼稚園で保育者としてのスタートを切り、終戦後の1948年（昭和23年）からは静岡第一師範学校（現・静岡大学）附属幼稚園に勤務し、1973～86年（昭和48～61年）の長期にわたり、同園副園長を務めている。退職後は、東京の東洋英和幼稚園に園長として迎えられ、1990年（平成2年）までの4年間、いわゆる名門幼稚園に新しい息吹きを吹き込んだ。つまり、戦後から昭和が平成に変わるまで、まさに第一線で幼児教育に携わってきた人材である。平成に入って以降は、複数の保育者養成校において教鞭をとり、後進の指導にあたった。そしてこうした経歴を重ねるなかで、日本の保育界における保育思想のひとつのターニングポイントとも捉えられる、平成元年の幼稚園教育要領の改訂にふかく関わったことも特記しなければならない。長きにわたり、その保育実践において、藤野は多くのものを発信し続け、それは数知れぬ子どもたちはもちろんのこと、保育者・研究者にも大きな影響を与えた。日本の保育界は、藤野の保育思想そのものを継承していく責任があるといえよう。

しかし本稿は、藤野敬子の幼児教育者としての業績に焦点を当てるものではない。ある信念をもって、昭和から平成を生きた一人の女性の姿を追っていくものである。ここに登場する彼女は、保育者としてはまだ新米の初々しい、青春のただなかにある少女でしかない。本稿は藤野を育んだ家族とその少女期までの記録である。しかしそこからは、後年の藤野の姿が、その保育思想が、そして藤野の生き方を示すなにかが、くっきりと浮かんできかはしないだろうか。

4. 藤野家の人々

藤野敬子は、1926年（大正15年）2月22日、広島県福山市で、^{しげり}滋、ひさ夫婦の次女として誕生した。そしてこの年の12月24日、大正はわずか15年で幕を閉じ、昭和が始まることになる。藤野敬子の人生はいみじくも、昭和という時代とともに始まった。なお藤野家は、敬子の生後2ヶ月時に松山へと移転し、その後、戦争末期までを松山で過ごすこととなる。

では、藤野敬子を育てた両親、家族とはどのような人々だったのだろうか。

父はまるっきし、家庭っていうか、実際的なことはだめ。松山中学を出たあと、一高に入ってね、そこで芥川龍之介とか菊池寛とかあんな連中と一緒に、劣等感もって、神経衰弱になっちゃって。つまり松山ではトップでいたでしょ。でも一高に入ってみたら、ちょうど芥川がいて、それで自分が頭角をそれほど現さない、ってことでなんか神経衰弱になっちゃったんです。松山のお山の大将で出て行って、東京でぺちゃんこになって（笑）。正岡子規っているでしょ。子規と父の腹違いの兄がいとこ同士なんです。だから松山では正岡子規の親類だし、おじいちゃんは銀行の頭取をしてたから、お山の大将で、東京に出たらぺちゃんこになって帰ってきて。ただ英語の検定試験を受けて、英語の教師をやってて、『ヘンリ・ライクロフトの手記』⁵⁾っていうのを訳したら、それが名訳で有名になったんですよ。それだけでね、この世的にはそれほどね（笑）。それで実際的なことはからっきしだった。それと私、似てるのよね。実際的なことからっきしだめなこと。

しかし、父・滋をうちのめしたという芥川龍之介が、彼について書き残している。

九 僕の体は元来甚だ丈夫ならざれども、殊にこの三四年來は一層脆弱に傾けるが如し。その原因の一つは明らかに巻煙草を無暗に吸ふことなり。僕の自治寮にありし頃、同室の藤野滋君、屢僕を嘲つて曰、「君は文科にゐる癖に巻煙草の味も知らないんですか？」と。僕は今や巻煙草の味を知り過ぎ、反つて断煙を実行せんとす。当年の藤野君をして見せしめば、僕の進歩の長足なるに多少の敬意なき能はざるべし。因に云ふ、藤野滋君はかの夭折したる明治の俳人藤野古白の弟なり（芥川龍之介「病中雜記」より）⁶⁾。

芥川が触れているように、滋の腹違いの兄は、正岡子規の従弟であり弟子として名を残す藤野古白（本名・潔）^{きよむら}という俳人であった。彼の子規に学んだ俳句は、清新な句風として明治の俳壇に頭角を現したが、1895年（明治28年）に25歳という若さでピストル自殺している⁷⁾。なお、藤野家と正岡家の親戚関係とは、子規の母・八重の妹、十重が古白の母であったということによる。

さらに、滋と古白の父親、敬子にとって祖父にあたる藤野漸^{すすむ}は、明治維新後、旧伊予松山藩主・久松家の家令を勤めた人物であった。明治時代の日本の「青春期」を、松山出身の三人の若者を主人公に据えて描いた司馬遼太郎の『坂の上の雲』に、藤野漸は登場する。

…家令は、旧藩時代ならば家老にあたるであろう。維新後、旧藩士が離れたあと、どの大名家もそのなかから人選して家令を置き、家政上の面倒を見させた。

久松家の家令は、藤野漸である。天保13年の生まれというから、この明治19年には満44歳になる。維新後も、

一武士は藤野。

といわれたほどに武士らしい人物で、文武の達人とされた。廃藩後は東京に出て会計検査院につとめたが、途中で退官し、久松家に入っている。のち松山に帰ってからは国立第五十二銀行の創設に奔走し、その二代目の頭取になったりしたが、このひとの存在をのちにまで郷党に印象づけたのは、その謡曲好きであった。旧藩と縁のふかい謡曲宝生流の保存につとめ、洋々会をおこし、その盟主となって、

一洋々居士

と呼ばれた。

子規の親戚で、叔父にあたる。子規が常盤会の給費生になれたのはこの叔父のおかげらしい。

好古は、軍服のひざを折って座敷に座っている。やがて、旧藩士たちのいう、

「藤野老」

が入ってきた。44歳で老といわれるのは気の毒なようだが、人柄に長者の風があってその呼ばれ方がふさわしい⁸⁾。

一方、母は外交官の父をもつ福井出身の女性だった。

母は福井高女を出て、婿がどっからどこまであるかわかんないくらいの大金持ちのところにお嫁にいったんだけど、失敗して。遊び人だったの、その相手が。ろくろくうちにも帰らなくて。それで奥さんをもらえばおさまるかと思ったら、母、ぼーっとしてるんでだめで(笑)、それで離婚して、東京のY W C Aに行っ、裁縫なんかの資格をとったの。だからY W C Aの教育を受けたわけね。母の父は外交官だったんです。それでまあ、離婚しろって言ったんでしょね。東京行きは父親が画策したんじゃないかしら。田舎に帰ってきたんじゃないわいそうじゃん。せっかくお嫁にいったのに(笑)。離婚したなんて、昔、恥ですもんね。

その後、お裁縫の先生なんかをやっ、で、父が見初めて結婚したんです。それで、ずーっと楽しかったんだけど、私が先天性の股関節脱臼で、その治療のために福岡の大学病院に入院したんです。その時、母が付き添って行って、父を一人残すのを、親類中が反対したのよ。滋さん一人でおいとくと、ろくなことがないって(笑)。でもまあ母は私のほうが大事だったから。案の定、父はそのとき遊びほうけて、借金一杯つくって(笑)。

でも母は器用でね、「婦人之友」の友の会に入ったり、衣食住全部手作りでやっ。母は実際的なことが上手だったんですよ。だから母に似れば、実際的なことが堪能だったの。私の洋服なんかを全部作っ、手作りして何でもやっ、でね。だから母に似れば、私ももうちょっとまじになったのに、それがだめだから。

このような夫婦のもと、三人の女の子が誕生する。陽子、敬子、悦子である。陽子は敬子の5歳上、悦子は4歳下の三人姉妹だった。しかし妹・悦子は幼くして亡くなっている。

下に悦子っていう、私の4つ下に妹がいたんだけど、疫病で亡くなったの。妹はすごい豪傑だったんですよ。その子がいる間は、私は小さくなって、間に挟まれて。私が小学校に行ったらね、うらやましくってね、私より4つ下なのにね、自分でちっちゃなかばんをかけて、

六角堂まで行って、母は妹がいなくて大騒ぎしたらしい。傑物だったんですよ。彼女が生きていたら、面白かったですよね。私はもっと小さくなっていたんじゃないかな。間に挟まれてね。

そして、残された姉・陽子と妹・敬子という姉妹の関係が、敬子の進路を問わずも決定していく。姉が初めの一步で、それを追う妹であったのが、結果として66年間にわたる幼児教育者・藤野敬子の人生を作り出したのである。その経緯は後に語られよう。

現在、藤野は姉と2人、熱海の急な坂道の途上にある静かな家で暮らしている。

姉が倒れて、家事をやるのが今3年目なんですね。元々家事は不得手だったんです。不得手だったから主婦にもならず、職業できたんですけど。家事が得意だったら、とっくに結婚して家事やってる（笑）。でも、今は家庭のことと畑と教会の仕事をやってるの。

穏やかな熱海での姉妹の生活に、月に1度、静岡から姉の息子夫婦がやってくる。独身を通した藤野にとって、姉の一人息子とその妻、その子ども達は、愛おしい家族である。

さて、改めて時を遡ってみよう。藤野は少女へと成長する最も多感な時期を、松山で過ごしている。時代は不穏な空気をまとい、加速度をつけて動き始めていた。しかし藤野自身は、時代に左右されることのない社会への眼差しを育み、ゆたかな時を過ごしていた。

5. 戦前・戦中編 松山で過ごした少女のころ

(1) 尋常小学校時代

両親ともに名門の出身であり、極めてインテリな家庭で、藤野は幼少期から少女期を、四国・松山で育った。

ただし、就学前の2年間、先天性股関節脱臼治療のため、福岡市の大学病院に入院や通院をしていたために、自身は幼稚園に通った経験はない。彼女にとって初めての学校は、1932年（昭和7年）に入学した松山東雲尋常小学校であった。

東雲小学校って、1学年が300人いたんです。先生に私、最前されて、300人の総代になったんですよ。どう考えても、私は小さい時に股関節脱臼で幼稚園に行かないで、病院にいましたからね。1番になるわけがないって自分で思うもんでね、いくら「藤野総代、藤野敬子」って呼ばれても、「は、い」ってちっちゃな声しか返事ができない。だからとうとう先生が姉にね、「もうちょっと大きい声で返事するように、おうちで練習してください」って言ったんだけど、本番でもやっぱり「は、い」ってしょんぼりして。それっきりで、あとは副級長ばかりだから、多分、クラスで2番くらいでとまったと思うんですけどね。でもそれで、最前されたってことも歴然と自分で感じてたんですよ。

そんな尋常小学校時代に、藤野はひとつの出会いをした。

母は「婦人之友」の熱心な読者であった。「婦人之友」とは、羽仁もと子が夫と共に「よい家庭からよい社会がつくられる」との信念のもと、1903年（明治36年）にその前身「家庭

之友」を創刊し、1930年（昭和5年）には読者の集まりとして「全国友の会」が発足するほどの支持を得て、現在創刊107年を数える「家庭雑誌」である⁹⁾。さらに羽仁夫妻は、1921年（大正10年）には教育問題に対する「婦人之友」の主張と実現の場としての新しい苗代として「自由学園」を創立した¹⁰⁾。そして1931年（昭和6年）からは「家庭生活合理化展」を全国で開催している。この展覧会は松山でも行われ、「友の会」会員であった母は連日手伝いに出掛け、藤野も会場へと足を運んだ。2年生の時だった。

「家庭生活合理化展覧会」っていうのが、松山で子どもの時にありましてね。「合理化展覧会」とはつまり、主婦を対象にした衣食住の展覧会なのよ。そこで家庭生活のあり方とか衣食住とかをずっと展示して。その展示の説明を自由学園の生徒がしてたんです。松山のボーっとしてる田舎の人から見たら、みんな言動がきびきびしているんです。それで憧れました。展覧会の時に食堂で、「自由学園の1日」というビデオがあったんですよ。それを毎日見ている、生徒がいろいろ自治的にやるのが出てましてね、私、自由学園に行きたくなっただけです。ずーっと行きたかった。でも父が許してくれなくてね。「理想をもってるけど、現実はそのな理想の学校でもないよ」と言われて、行かれなかったんです。行きたい行きたいと思ってたけど、それは断念したんです。

こうして、憧れの自由学園への進学自体は断念したものの、自由学園、そして羽仁もと子の存在が藤野の心に刻まれた。そして、尋常小学校卒業後の進路は父の勧めに従ったが、その進路こそが彼女のその後の人生に大きな影響を与えることとなった。当時の学制によれば、初等教育機関としての小学校尋常科が義務教育6年制としてあり、その後の進路として、中学校、高等女学校、高等小学校などがあった¹¹⁾。

松山には、県立で城南女学校と城北女学校と一流校があって、それに二流、三流の学校があるわけだけど、その中にミッションスクールの、私が出た松山東雲学園があったんですね。その西村郁夫先生っていう先生が、京都大学に行かれて、京都大学の総長のお嬢さんをももらったくらい、将来を有望視されてた方なんです。だからどんなにでも出世できる道が開けているのに、松山に帰って、ミッションスクールに一生を捧げた人。その先生と父が友人で、父は先生を尊敬していたので、娘二人を託したんですね。

それでね、小学校6年生になって、受験する進学組っていうのと高等小学校に行く受験しない組があったんですね。クラスは50何人いたんだと思うんですけど、先生は補習する受験クラスを南側のあったかい席に固めましてね、高等小学校に行く人は廊下側に集めて。母は私がミッションスクールなんて当然通るし、受験勉強しなくていいからって、参考書の代わりにドッチボールを買ってくれましてね、それで高等小学校に行く人たちと仲間になって遊んでたんです。みんなが居残りして勉強する間も、ドッチボールで高等小学校に行く人と遊んでいた。そしたらね、今までと違って、小使い室に行っても、文房具を買いに行っても、向こうの応対がぞんざいになったんですね。友達も、県立滑ったら藤野さんと一緒になるねって言って（笑）。その時初めて、「差別」ってことに気がついたんです。だから城南に行くつもりで日向側にいたら、そんなこと一生気がつかないと思う。

一番びっくりしたのは、受け持ちの先生が授業中に、もう私が手を挙げてても当ててくださ

らないわけね。日向の方に「わかんないのか。そっちの子頑張り」って言って。わかんないと、悔しそうに「じゃあ藤野」って（笑）。それで一番癪にさわったのが、「末席」って言葉が出た時に、先生が黒板に「末席」って書いて、「この部屋で末席はそちらだ」って高等小学校に行く方のグループを指されたんです。それで私は真っ赤になって怒ってね。私一人侮辱されたと思って怒ったんだけど、私は元々女学校に行くんだから、本当に侮辱されたのは高等小学校に行く人たちで、みんなどんなに怒ってるかと思ったら、真っ赤になって怒っているのは私しかいなかったんです（笑）。高等小学校に行く生徒は誰も怒ってないの。そういう侮辱に慣れているっていうんでしょうかね。でも私は一人で真っ赤になって怒ってたんですよ。

ミッションスクールは試験なんかどうでもいい所だったから、そのおかげでね、底辺の人たちと交わってたっていうのは、ありがたかったと思うんですよね。その人たちは本当に人情が厚いし、素朴だしね、偉そうなどこなくて、いい人たちでしょ。で、たまたま私がドッチボール持ってるもんで、人気があって（笑）。

そういうことを経験して、それで受験に行ったら、ほんとに学校ががらっと違うんですね。それで、もういろんなところに夢中になって、試験問題なんてもう目じゃなかったんですね。いい加減にして帰ってきたら、受け持ちの先生に「何が出た」っていちいち聞かれて、あんまりよく覚えてないもんで、やっぱりミッションスクールに行く奴らはだめだって怒られたんですけど（笑）。とにかく学校の違いうっていか、教師が君臨してて、生徒が下にあるんじゃないなくて、教師も生徒もみんな一緒に神様の前に跪いているというミッションスクールは全然違ってたので、そこでびっくりしたんです。

今でも考えると、女学校のユニークな教育がふっと私の保育のいろんな時、土台になっているんですね。東雲学園に行かなかつたら、私の人生は変わっていたんじゃないかなと思います。

だから人生なんて、やっぱりそういうちょっとしたところで変わってくるのかもしれない。私はまっすぐに、女学校も一番キラキラしていた県立ではなくて、一番普通の人が行く広い通りを通らなかつたっていうことですよ。

(2) ミッションスクールの生活

その後の藤野敬子の人生を考えたとき、松山東雲学園での女学校生活は珠玉の時間だったといえよう。県立女学校に行った以上に、おそらくキラキラとした少女期を過ごし、しかしその一方で社会の大勢への疑問をもつ目を養ったのも、ここでの日々だった。

父が西村校長のところに娘を託そうと思ったのは、とても卓見だったと思います。面白いことに、私立で経営が大変だったらしいので、西村先生は、自分の先輩や後輩で松山の男子校なんかの校長までやった人が退職してね、恩給がつくとお呼びになるんです。だから元校長ってのが8人くらいいたんです。みんな恩給もらって、その差額で済んでしょ、給料が。だから数学も生物も物理も化学もみーんな男の校長先生を務められた方がずらっと。小学校の古手の先生は庶務とか会計に入られて。それはもっぱら経営のためだったんですね。だから月給は少して、でも人材は豊富で、すごく幸せだったんですね。

校舎自体もね、日本の白壁とね、銀ねずみの瓦屋根の校舎なんです。日本建築の良さを活

かしていました。中はすごい洋式なんだけど、外のたたずまいはね、ほんとに立派な日本建築で、食堂なんかは洋式なんだけど、家政科の中の日本間なんかもきれいだった。

学校の授業は、選択科目っていうのがたくさんあって、自由に選べるってことがあった。選べることの楽しさをその時に教わったの。それと自習時間っていうのがあるんですけど、その時に体の弱い人は体育館のバルコニーで日光浴するんですよ。日光浴する洋服っていうのがあって、それに着替えて、日光浴するんです。とにかくその人の個性や能力にあわせて、必要なコースを様々に多様に提供してくださった。そういうのもあとの幼稚園で、子どもが選ぶこととか、そういうのが好きになったのは、やっぱりそういうのをこちらが受身でしていた時に、経験したことが大きいと思うんですよ。

それでたとえば遠足ですと、行きは全校生徒が揃って行くんです、目的地まで。松山へ行くとおわかりになるんですけど、お城山っていうのが真ん中にありまして、そのお城山の中間にミッションスクールがあったんですね。ですから、かなり遠く離れたところからでもお城山は遙か彼方に見えるんです。それで帰りはね、自分で好きな道を選んで、とにかく3時までには学校に帰り着くように。ただし、一人になってはいけないっていうだけで、ばーっと離されるんですよ。どっちの道行こうか。こっちのほうが良さそうね。あ、誰か先客があった。あ、こっち行こう。迷いそうになって、ふーっとお城山を見ると、方角だけは合ってるわけですから(笑)、いろいろ自分たちで思って、無事に辿り着くの。

つまり生徒が自由に選択する幅、選択科目がたくさんあって、頭ごなしにされることが少なかったのね。それで宣教師の先生もいらして、お昼は食堂に先生が必ず一人ずつ座って、食堂で先生と生徒がなごやかに話すんです。そういう、メリル先生という外国人の先生は、お昼はいつも果物だったの。私たちはうらやましくてね(笑)。

だから、選んで、自分で各自考えてするってことの楽しさを、女学校のときに私は教わったのが、やっぱり保育者として強かったんじゃないかなと思うんですよ。

このような女学校生活のなかで、1940年(昭和15年)、3年生の頃、藤野自身も洗礼を受けている。しかし時代は戦争へと突き進んでいた。

我が家は非国民。父は英語の教師だったし、イギリスびいきだったし。うちは軍人嫌いで、戦争一色にならなかった(笑)。うちは、正岡子規の親戚だし、おじいさんが銀行の頭取だったりして、松山だといわゆる名門っていう家柄だったんですけど、その家柄なんていうのは、自慢するにも、戦時中は全然それと反対になったからね。あんまり羽振りもよくなかったしね。

姉が行っていたので、日曜学校には小学校から行っていました。大街道教会です。その佐藤牧師っていう人が偉い人でね、とっても。戦争中だから、護国神社に参拝しろって話が来るわけですよ。それをみんなで相談したけど、佐藤牧師だけは絶対に行きたくないって言ってね、そういうの貫いたんです。あの頃は大変だったんですよ、キリスト教は。戦後はキリスト教は華やかになりましたけど、一番弾劾されてときのキリスト教でしたからね。でもそれを守り抜いて。骨のある先生だったから。戦争中になびかない人なんて少ないですよ。

また女学校もいろいろ苦難のときでね、大変でした。でもそれに耐えて、つぶされないぎ

りぎりのところで妥協しながらきたでしょ。西村先生はその苦勞がたたって、途中で亡くなるの。

ホイテ先生っていう先生、ほんとはホイトっていうんだけど、松山弁で「ほいと」って言うところのことなのね。それで、ホイテ先生って呼んでるわけね。その先生もなかなか骨のあるいい先生でしたね。苦勞なさったんじゃないかしら。戦争中だから、連合司令部の場内の兵隊さんのところに勤勞奉仕に行く時も、ホイト先生は真っ先に先頭に立ってね。やっぱりそういう時に後ろ指を指されないように、ミッションスクールは戦争に反対してるって思われぬように、一生懸命勤勞奉仕に真っ先に行ってるね。

昭和17年頃でしょうか。アメリカ人のメリル先生が帰国する時も、送別会なんかしないで、夏休み中に私と友達と2人がご挨拶するようになって呼ばれて、誰もいない学校で、最後だから英語でご挨拶したいってことで、大急ぎで日本人の英語の先生のところに行って、こう言いたいんだけどってお願いして、ぱっと書いてもらったの。それを私と友達が2枚持って、私が始めのところをするするするって言うと、友達が次を覚えてて、友達が言ってる間、私が次を覚えてて、2人でこぼこぼこぼことね、ご挨拶したんですよね。そしたら先生は最後の送別の言葉を英語でとにかく曲がりなりにも言えたでしょ。すごく喜んでくださって、べらべらべらって言われたけど、今さらわかんないって言えないし。「お姉さんによろしく」ってこのだけはわかったんですけどね。それで、お別れしたんです。

だからやっぱりキリスト教の学校に、そういう時代にいたってことはありがたいですね。キリスト教が弾圧されたときにいたってことは強みなんです。戦後の華やかな時からじゃなくてね。

(3)「幼稚園」との初めての出会い

このように戦時体制へと急速に流れる時代のなかで、藤野は、その後の人生を決定づける「幼稚園」という場所と初めて出会う。しかし、その出会いは全くの「偶然」であった。そもそも松山東雲学園は四年制の高等女学校であったが、その後に補習科2年制があり、家庭科と英語科が設置されていた。

実は姉が、補習科の英語科1年に在籍していて、2年に進もうと思ったら、他の人はみんな、お嫁に行かなきゃならないから、1年で辞めてしまったんです。姉一人だけが気がつかないで、そのまんま2年に進むつもりでいたら、西村先生がうちに尋ねてみえて、「たった一人のために2年のコースを設けるのは、大変経済的に苦しい。だからもしできたら、皆さんと同じようにここで辞めていただけないでしょうか。そのかわり石手川幼稚園というミッション系の附属幼稚園があるから、そこに勤めてくれませんか」って、父にわざわざ頭を下げて頼みにいらしたんです。それで、姉が石手川幼稚園に勤めることになったのが、幼稚園の先生の、そもそもの初めなんです（笑）。私は、就学前に股関節脱臼で福岡の病院に入っていたので、幼稚園に行ったことないんです。そこで遊びに行ったら、石手川幼稚園がおもしろかったんです。宣教師が残したかわいらしい英語のちっちゃい優しい絵本が一杯あったり、お人形さんの家があったり、とにかくおもしろいことが一杯ありましてね。楽しうだから、ああ、私も幼稚園の先生になろうと、その時に思ったんです。

それで今度、私が卒業する時に、「私も幼稚園に就職したいです」って手を挙げたら、ミッ

ション系の幼稚園に口がなかったので、それじゃあ、補習科の英文科をやめて、保育科にしてあげましょうって。私を含めて9人のためにその年1回限り、英語科が保育科になったんです（笑）。

先生は元々心理の先生がいたし、幼稚園のプロパーは勝山幼稚園っていう女学校の附属幼稚園の主任の和田先生がしてくれた。それで私、当然そこに行って、1年たったら、勝山幼稚園に空きができたので、「じゃあ、お待ちどうさま。藤野さん、勝山幼稚園にどうぞ」って（笑）、橋本さんっていう友達と2人で勝山幼稚園に行ったの。だから自分で幼稚園の先生になろうとか、自分でこういうところ目指したこと一度もないわけね（笑）。姉も経営難のせいだし（笑）、そういうわけでしょ。

偶然、藤野の人生に入りこんできた「幼稚園」という場所。そもそもは姉・陽子が、学校の経営難のためという理由で関わった最初の一步。それを追った妹・敬子。こうして幼児教育者・藤野敬子が誕生した。

5. 戦中編 保育者になったころ

(1) 勝山幼稚園の風景

松山は松山城ってお城山が真ん中にあるんですね。そのふもとに勝山幼稚園はあったんです。園庭から一番坂の上を登ると、遙か彼方に瀬戸内海の青い海が見えたんですよ。それで子どもたちと「海を見に行こう」と言っただけ、駆け登りをして、海を見て楽しんでいました。

園舎は、お玄関があると、そこには廊下があるんですけど、まず遊戯室が真ん中であって、そこから庭にも出られるし、年少の組にも行かれるし、年長組にも行かれる。両方から出てくると遊戯室で、廊下がないんですね。学校みたいに、廊下がずらっとあって、両端に教室が並ぶとかたちとは全然違ってたんです。だから遊戯室でなんかやる時は、お客さんはそれぞれの保育室から見物すれば見られるわけ。元々、廊下のない幼稚園っていう私の、ずーっとあとからつないだ構想のそもそもは、この勝山幼稚園の建て方から得たんだと思うんですよ。

園庭でもね、日当たりが強いから、なんか日覆が欲しいって言ったら、園長が宣教師だったんですが、庭漆の木の苗木を1本持ってらしたんですよ。それを1番園庭の真ん中に植えた。大きな木になりましたね、庭漆の木が。それが、夏は日陰になって、冬は葉を落として日向。だから、日覆ってテントなんかをやるよりも、庭漆の1本の木の効果って、枝豆みたいなのがぶるさがるし、子どもが遊べるし、夏は日陰、冬は日向、手入れはいらない、すごい重宝なの。それがとっても印象に残っています。それから日本文化を象徴するような小さなままごと道具を一杯集めてあって、それが大事にしまってたったり、他にも日本の古来の文化、茶釜とかいろいろんな家財道具とかを集めて、コレクションしてらして、それを子どもに時々見せて、っていうのが幼稚園の伝統としてあったんですね。

(2) 温かく、導かれて

そこでの2年間はすごく楽しかったですね。元々教えてくださった和田先生が主任だし、

女学校の先輩もいて、内々でだから、どうしたって楽しかったですね。

自分たちの思うとおりにやれたんです。ご飯を食べた後、うがいするコップとブラシを、籠の中にぼーんと子どもが入れておくの。それをお台所で洗って、また配ってたの。一緒に入った友達と「あれ、不潔よね。ちゃんと個別の戸棚があって、藤野敬子ってところに敬子のブラシとコップがささるようにしたいよね」って言って、私たち若い二人は「そうやってもいいですか」って。「いいですよ」って主任の和田先生が言ってくださったので、空き箱にね、釘を打って、いちいちかけれるようにしたの。そしたらそれ不便で、また乾きにくいし（笑）。しばらくやってみて、「やっぱりあれは具合悪い。あのざっくり籠の中に入れてざっばって洗う方が手間もかからないで衛生的だったから、元に変えたい」って言ったら、先生はまた「いいですよ。元通りしなさい」って言うの。で、私よりも5年くらい先輩の先生がこころろ笑うのね（笑）。「あんなこと始めてって思って、でも黙ってたら、やっぱりだめでしょ」って笑うのを今でも覚えてる（笑）。でも若い2人組がおもしろいことを思いついて、それをやらせたもらってってというのが、ありがたいですよええ。

それとかね、子どもがその時分、ブランコに乗りたくてよく大変だったんですけど、私たちも「いっぺん思いっきりブランコに乗ってみたいんですけど」って言ったら、和田先生は「いいわよ。今から乗ってらっしゃい」って言われて、それで放課後、誰もいないなかで、ブランコに橋本さんと二人でずーっとふらふらするまで、酔っ払うまで乗って（笑）、「もう先生、堪能しました」「よかったわね」って（笑）。なんか、そういうこと、若い人がやりたかってことを最大限、温かく許しながら、導いていただいた2年と4ヶ月でね。

藤野自身、後年「静岡でも、東京の東洋英和でも64歳まで伸びやかに保育ができたのは、そのお陰です」と、勝山幼稚園でのこの2年余りこそが、その後の保育の基盤となる、時と場所であったと記している¹²⁾。

さてちょうどその頃、姉・陽子は通っていた大街道教会の信者の息子で、静岡女子師範学校に勤める男性とお見合い結婚をしていた。ここで、松山の藤野家と静岡との縁ができたことになる。そして、敬子にとってはただ一人となる甥が誕生した。

甥が生まれるとき、母がそちらに手伝いに行っていたので、家には父と私と二人残されて、まあ惨めだったの。二人とも家事が不得手で（笑）、全く惨め。あれ今でも忘れられない（笑）。そしたら、女学校時代からの友達と一緒に勝山幼稚園に勤めた橋本さんがみるにみかねて、朝、うちに来て手伝って、それから勝山幼稚園に行った（笑）。わざわざうちに寄って、いろいろアドバイスして、それから二人で幼稚園に行ったんですよ。今でもお世話になったなあって。

まだ女学生にしか見えない二人が、毎朝、お城山のふもとにある幼稚園を目指して、楽しみに軽やかに歩く姿が目につかぶ。保育者としての第一歩は、藤野にとって青春の一頁でもあった。

(3) 戦争が奪ったもの

しかし、勝山幼稚園での日々は、そのまま戦争の日々でもあった。幼稚園での穏やかで温かな生活も時代の渦に否応なしに巻き込まれていく。

この時代のことは藤野自身の記した文章から引用しておこう。

1944年に講習会で、監視している軍人の前で講師が「今はままごとをしている場合ではない。組を小隊、学年を中隊、園全体を大隊に組織して戦争ごっこを」とか「ぶらんこや滑り台は惰性で動く安易な遊具だ。自力で動く鉄棒や棒投げに切り替えなさい」と話されたのです。この時、ただ一人、親愛幼稚園の宇都宮先生が立ち上がって、ままごとが子どもにとって、いかに大切かを唇を震わせながら力説なさり感動しました。

園の裏にはお城山につながっていて、竹やぶをよじ登ると、はるかかなたに瀬戸内海の青い海が見晴らせました。「海が見えるまで」を合い言葉に子どもたちとよく登ったものです。ところが1945年にそこに陸軍が横穴式の防空壕を勝手に掘り始め、楽しみがいっぱいあった裏山は立ち入り禁止になりました。ただでさえ警報の鳴るたびに避難して遊びが中断していたのに、庭が工事現場になってしまい、7月末の空襲で園舎が焼失、廃園に追い込まれてしまいました¹³⁾。

1945年（昭和20年）7月26日、23時30分、松山市は焼夷弾爆撃を受けた。この空襲によって被災面積479㎡、罹災戸数14,300戸、罹災者2,200名、死者・行方不明者259名に達し、市街地の大半は灰燼に帰した¹⁴⁾。藤野も自宅と幼稚園を焼かれた。こうして、松山での保育者生活、女学校からのキラキラとした青春時代は、突如幕を閉じた。

女学校は復興するけれども、幼稚園を復興する資金はないってわけで、その時分、姉が結婚して静岡にいましてね、義兄と姉と息子と3人で暮らしてたんです。それで、私たちは焼け出されて、麻生村ってとこに移ってたの。そしたら義兄が「うちは幸い焼け残ったから、静岡へ親子3人来ないか。小さいうちだけ一緒に住もう」って呼びに来てくれてね。それで静岡に来たんです。私は初めて松山を離れることになって、母と「よく富士山が見える」って喜んで来たの。

1945年（昭和20年）8月15日、終戦。藤野敬子は20歳を迎え、そして戦後という時代を静岡という新しい地で始めることとなった。

6. 忘れ得ぬ子どもたち

藤野は、常に様々な子どもの姿を語っている。それもつい昨日かかわって、また明日も出会うような、そんな生き生きとした表現で。以下はそんな語り<>の一部である。

(1) 新米保育者を育ててくれた子ら ～松山の勝山幼稚園で～

Sちゃんっていう子がいて、しょっちゅう窓に上がったり、テーブルのところにも上がるんですよ。そのたんびに怒ってたら、主任の和田先生が「藤野さん、まだ気がつかないの。あなたね、近づいたときのSちゃんの顔を見て御覧なさい。とろけそうな嬉しそうな顔してる

よ。あなたにだっこして降ろしてもらうのが嬉しくて上がってるの。気がつかないの」って(笑)。和田先生に言われるまで気がつかないで、いっしょうけんめい、私、Sちゃんを降ろしてたのね。そのSちゃんが卒業するときに、「もう2週間で幼稚園終わりだね」ってしみり寂しそうに言ったの。私、長いこと幼稚園の教師してますけど、小学校に行くって、たいていみんな喜んで行くんですよ。幼稚園に名残惜しむ子なんてあんまりいないのね。ただSちゃんだけがしみじみと名残惜しんで、最後に来た時に、窓から見てたら、私たちの視線を後ろに充分感じながら、とうとう振り向かないで出ってたんです。

あとTちゃんとかは面白くなって、けんかがあって、私が手に負えなくて困ってると、そばでこにこ笑いながら、「なんじら、たがいに、あいあいすべし」なんて言うんですね。そう言ってくれるおかげで、ふっとなごんだりとか。子どもに助けられたんですよ。

(2) 子ども本来のあり方を教えてくれた子ら ～東京の東洋英和幼稚園で～

Sちゃんっていうダウン症の子がいて、その子を軽井沢のキャンプに連れていったんですよ。他の親はそんなに心配しないけど、そのお母さんだけは荷造りをして、汽車の時間を調べて、電話一本あったらすぐとんで来れるようにうちで支度してらしたの。それで、現場に着いたら、みんなは荷物を片付けて、自分のベットの始末なんかをするんだけど、Sちゃんだけ一人、下のバス停のところまで行くわけ。私は仕方がないから、そこについていったんです。そうしたら、Sちゃんはバスが着いたら、「お母さん降りてくるかな」ってずっと待ってるわけね。でも、来たバスに乗ってないでしょ。その次のバスにも乗ってないでしょ。やっとあきらめたら、今度は垣根のないよそのおうちに入って行って、縁側の方に行ったんです。それで私、「Sちゃん、そこはよそのお宅だから入らないで」って言ったら、そのおうちのおばあさんが出てきて、「かわいいお孫さんですね。私が外へ出ますよ」って出て来てくださったの。私とSちゃん、おばあさんと孫になっちゃったのね。そして、そのおばあさんと話したら、それでSちゃんは落ち着いたんですよ。それで「さようなら」ってご挨拶して帰ったら、それでSちゃん、あと3日大丈夫だったの。軽井沢のおばあさんに「かわいいお孫さんですね」って言われたとたんに、Sちゃんの機嫌が直ったんですよ。だから私は何にもしてないんだけど、そのおばあさんのおかげで、とにかく無事に終わったんです。それで、帰ってきて上野に着いたとき、お母さんは喜んでね。実は荷物持って待ってたんですけど、おかげさまで一本も電話がかかってこないからって喜ばれたんですよ。

もう一人、Mちゃんっていう子もちょっと知恵遅れの子で、その子も連れてったら、他の子はたとえば二段ベットのどっちに寝るとか、荷物をどこに片付けるとかやってるときに、やっぱりぼーんと自分の荷物を放って、一人森に出てったんですよ。私も他の子を放っておいて、Mちゃんで行ったら、森の中で二時間ばかり遊んで。それでね、私考えたの。他の子だって、長い時間汽車に乗って来て、軽井沢の森に行ったら、まずMちゃんみたいに森に行きたかったんじゃないかって。部屋でどっちが上に寝るとか下に寝るとか、そんなのはあとで決めて、荷物をぼーんと置いて、森でいっぺん遊ばせて、それから疲れた頃部屋に入れればいい。そのほうが自然だと。みんなに話したら、じゃあ来年からそうしましょうって(笑)。Mちゃんに教わったの。

だから他の子は先生の意向をそれとなしに聞いて、その通りにするんだけど、合わせるんだけど、本来のあり方を見せてくれるのは、MちゃんとかSちゃんなんですよ。そういう先

生の顔色に合わせられない子どもたちから、本来ああいうとこに行ったとき、子どもがやるべきことがわかったんです。

(3) 生きる力を教えろと突きつけた子ら ～静岡大学附属幼稚園で～

この間、クラス会をしたんですよ。幼稚園のね。私がやめるちょっと前に卒業したくらいの子かな。そのクラスが集まったのね。それでJちゃんって子だけ自殺している。いい子だったのよ。お母さんもいい人で。で、Jちゃん、東京の大学に行って、東京から帰ってくると、お父さんが「うちを継ぎなさい」って言うんだけど、あの子は継ぎたくなかったの、まず私のうちに来てゆるんで、おばあさんのうちに行ってゆるんで、それでやっとうちに帰ってたのね。そのJちゃんが自殺したんですね。なんであんないい子が自殺しちゃったんだろう。いい子だったよ、Jちゃん。ただね、けんかの記録をその頃とってたんだけど、Jちゃんのけんかの記録がないの。揉めごとがあるとすーっと抜けるの。で、しばらくこう迂回してて、収まった頃、すーっと帰ってくるの。だからね、私のけんかの記録にJちゃんはなかったの。その時分からトラブルとかそういうことを避けてたのね。で、そういう弱さがあるってこと、わかったら、けんかの中にJちゃん、ぶちこんでやればよかったんだけど、その時は気がつかなかったんです。自殺されてみて、初めて、ああ、あのときからいやなことは逃げてたなって。それに気がついたのは遅いんですね。いい子だったのにね。だけどうちに来てゆるんで帰る、ゆるまないと家に帰れない、そういう弱さがあること、もうちょっと知って励ましていればよかったんだけどね。だからやっぱり人間の弱さとか、そういうことに私たちがどう立ち向かうべきかっていうことを考えます。

もう一人、若くて自殺した子は、幼稚園から小学校に行った時、時々、幼稚園に帰ってきたので、なんべんも追い出したのね。ひょっと見ると、うらめしそうに覗いてるの。でもそれって幼稚園に心が残ってるってことでしょ。他の子は小学校に行ったら、幼稚園の先生に会えば懐かしいけど、わざわざ覗きにきたりしないわけよね。それでその子もね、私がICUから帰ってきてクラス会に行ったら、中学に進んでたんだけど、他の子は「ああ〇〇ちゃん」ってわかるんだけど、その子は面変わりしてたのね。ちょうど思春期で。ちょっとHくんってわからなかったら、「先生、僕のこと忘れた」ってショックなのね。すぐにHくんって言ってあげなくて、よく見たらああHくんかって。「先生は僕がそんなに遠い存在だったのか」って。その子も若い時に自殺したのね。ちゃんとしてあげれないのね。だからそういう弱さをもっている子どもに気づいて、ちょっと鍛えとかなきゃいけなかった。だからJちゃんとかHくんとかデリケートで弱すぎる子ほど、どうやってたかっていうのが、自分にはできてなかった。それができない子どもはやっぱり気をつけなきゃいけなかった。難しいですよ。だからいい教育したつもりでも、一人でもそういう子ども出したらね、やっぱりね。だから、そういう微妙な、デリケートな子どもの心をどうちゃんと受け止めてあげるかってこと、私、失敗してるんですよ。

7. 「藤野敬子の戦後史」編纂に向けて

「人は誰でも語るべきものをもっている」——筆者はこれまで、それぞれの背景をもったさまざまな人々に対してインタビューを重ねてきたが、この思いは揺ぎないものとしてある。

しかし、藤野敬子という人ほどの〈語り手〉には未だ出会ったことがない。その経験のゆたかさはもちろんであるが、人生のある種のドラマティックさ、という点では彼女を越える人は当然、いる。しかし、日常世界の中のその一つひとつの経験の鮮明な記憶をひとつの物語として自ら解釈し分析し、いわば「藤野語」とでもいうのだろうか、独特のリズムと表現で行われる〈語り〉は圧巻である。保育界において、保育実践者として他に類をみない存在性をもつその人は、稀有の〈語り手〉でもあった。

その藤野氏の主体的に生きた現実を果たしてそのまま「データ自身に語らせる」ことができたかどうか、現時点では甚だ心もとない。だが、本稿は「昭和から平成を生きた女性幼児教育者の物語世界」の、まだほんのプロローグにすぎない。次稿では戦後の彼女の人生に、日本の保育史を、さらには彼女に影響を与えた女性たち——A・M・マクラクラン、羽仁もと子、H・ヘファナン¹⁵⁾らの人生をも交差させて、藤野敬子という一人の女性の人生を、戦後という時代とともに、さらに分厚い記録として編纂していくことを目指していきたい。

〔付記〕本稿は、平成21年度常葉学園短期大学教員研究奨励制度研究助成費の交付の成果の一部である。

¹⁾ 常葉学園短期大学保育研究会編「保育と実践 第3号」、57、2008.

²⁾ 2007年8月5日に実施された「第28回常葉学園短期大学保育科夏期ゼミナール」におけるシンポジウム、〈保育の中の遊びと学び〉のシンポジストの一人としての発言である。

³⁾ 佐藤郁哉『フィールドワーク 増訂版』、76、新曜社、2006.

⁴⁾ アニー・メイ・マクラクラン (1895-1991)。カナダ・メソジスト教会婦人伝道教会に属し、1924年(大正13年)に来日。静岡英和女学校に配置され、教師・幼稚園・教会伝道・静岡ホームの奉仕に働いた。戦前はさらに山梨英和幼稚園長も務めたが、1942年(昭和17年)に一旦帰国する。そして終戦後、1947年(昭和22年)に日本・静岡に戻り、英和での授業のほかに若い人を集めてのバイブルクラスを開いた。そしてこのクラスに藤野氏は参加していた。マクラクラン氏に関しては次稿で詳しく記したい。松縄善三郎『倭文はた 愛と奉仕の人々』、79-90、静岡英和女学院同窓会、2004.

⁵⁾ イギリスの小説家、ジョージ・ギッシング (1857-1903) の隨筆集。日本では、1924年(大正13年)に初めて、藤野敬子氏の父・滋氏の訳で春秋社から出版された。

⁶⁾ 芥川龍之介『芥川龍之介全集 第8巻』、115-116、岩波書店、1978.

⁷⁾ HP「俳句空間一豈 weekly」<http://haiku-space-ani.blogspot.com/> (2009年9月20日閲覧)

⁸⁾ 司馬遼太郎『坂の上の雲 (一)』、245-146、文藝春秋、2009.

⁹⁾ HP「婦人之友社」<http://www.fujinnotomo.co.jp/> (2009年9月20日閲覧)

¹⁰⁾ HP「自由学園」<http://www.jiyu.ac.jp/> (2009年9月20日閲覧)

¹¹⁾ 文部省『学制百年史 (記述編 資料編)』、帝国地方行政学会、1972.

¹²⁾ 藤野敬子「最初に育てていただいたこと」『幼児の教育 2007 10号』、41、フレーベル館、2007.

¹³⁾ 同上、38-39.

- ¹⁴⁾ HP「都市空襲」<http://asahi-net.or.jp/~un3K-mn/kusyu.htm>（2009年9月20日閲覧）
- ¹⁵⁾ 1946～47年（昭和21～22年）に連合軍最高司令部民間情報教育部顧問として滞日し、総司令部の日本教育指導に参加した教育博士。藤野氏は彼女の講演会に出席し、直にその話を聞いている。その時のエピソードについては次稿に記したい。